

## アメリカの原爆、日本の原爆

沖縄県立那覇高等学校

前原 芽衣

去年の夏、何気なく見た報道番組の内容に私は衝撃を受けた。テレビの画面には、当時高校三年生の古賀野ノ華さんと、壁に描かれた大きな「キノコ雲のロゴ」。最初はそれが何を表しているのか全くわからなかった。説明を聞くと、それが、アメリカにある高校のロゴマークで、「日本に投下された原爆のキノコ雲」であることがわかった。それを聞いてもまだ、私の頭の中にはてなマークが溢れていた。何故そんなものが学校のロゴマークになっているのか、更に困惑は続いた。そのロゴマークには「キノコ雲は我らの誇りだ」という意味のキヤッチフレーズがついており、町の住民たちに愛されているというのだ。アメリカでは、日本に投下された原爆は、戦争を終わらせ、多くの命を救ったものとされることも多い。戦前、実際に投下された原爆のプルトニウムが生産されていたというその町でキノコ雲は住民の誇りなのだ。私はショックを受けた。今まで、広島と長崎に投下された原爆について沢山の事を学んできたが、アメリカで原爆がそのような捉え方をされていることは知らなかった。広島、長崎の原爆で亡くなった方々のことや、被爆者の苦しみについて長い間勉強しただけに、悲しいような、悔しいような、やりきれない気持ちになったのを覚えている。被害者の実情に目を向けず、国の行為を讃えている人々に苛立ちすら感

じていた。

時が流れ、去年の秋頃。私は、「ある晴れた夏の朝」という本に出会った。学校の図書館で偶然手に取った本だ。アメリカの高校生八名が、広島、長崎に落とされた原爆について否定派と肯定派に分かれてディベートをするという内容で、自然とあのニュースが頭をよぎった。私は、アメリカ人は原爆を無条件に肯定していると思い、圧倒的に原爆否定派が正しいだろうと考えていた。しかし読み進める度に私の心は揺れ動いた。原爆を肯定する四人の生徒の主張にも、「ああ、確かに。」と思える部分が沢山あったのだ。それだけではない。最初、アメリカ人は原爆の恐ろしさを知らないのだと思いながら読んでいたが、私は、第二次世界大戦中に、日本兵に殺された中国人が原爆で亡くなった人数の百倍だったことを知らなかった。アメリカ人なら誰もが知っているという「バターン死の行進」も知らなかった。これは日本の捕虜となった約七万五千人のアメリカ兵が、百四キロメートルもの距離を行進させられたという出来事である。行進の間、捕虜たちは飢餓にさらされ、意味もなく撃たれ、生き埋めにされるなどの拷問を受けていたことがわかっている。私は日本人として原爆や戦争について学んできたが、一步後ろに下がってみると、私こそ無知だったのだと思知らされた。日本人が犯した過ちを知らなかったことをとても恥ずかしく思った。だからといって原爆を肯定することはできないが、私がこれらの出来事

を知らないということは、アメリカの人々が日本の原爆を知らないのと同じな  
のではないかと感じた。だとすると、現地に住む人々は、あの時の私のように  
辛い気持ちになるはずだ。私たちは、もっと視野を広げて戦争について考える  
べきではないだろうか。

アメリカと日本の原爆に対する意識の違いを感じた古賀野ノ華さんは、その  
違和感を心に留めるだけでなく、行動に移した。日本人である自分が原爆に  
対してどのような考えを持っているのかを動画にまとめて、キノコ雲を誇りだ  
と信じる人々に伝えたのだ。その動画を見た人たちは、「あの動画がなければ日  
本側の意見を聞くことは一生なかった。」「あの動画はこの学校に必要なだった。」  
と、野ノ華さんの勇氣ある行動を称賛した。動画をきっかけにキノコ雲のロゴ  
に対するイメージが変わった人も大勢いただろう。しかし、野ノ華さんは学校  
のロゴマークを変えるために動画を配信したわけではない。ただ一日本人とし  
ての意見を知ってほしかったのだ。

戦争、平和への向き合い方はこうあるべきなのだと思う。自分の見方だけを  
信じるのではなく、多方面から戦争の真実を見つめることで、平和を追求し続  
ける。外国や、次の世代に戦争の記憶を正しく伝える。時に、意見がぶつかる  
ことがあっても自分の考えをむりやり押しつけることはせず、互いに理解しよ  
うとする姿勢は忘れない。私はこれから戦争について学ぶことがあると思う

が、自分の知らない戦争がまだ沢山あることを自覚し、固定観念に囚われることなく、戦争の真実について勉強、発信し続けたいと思う。